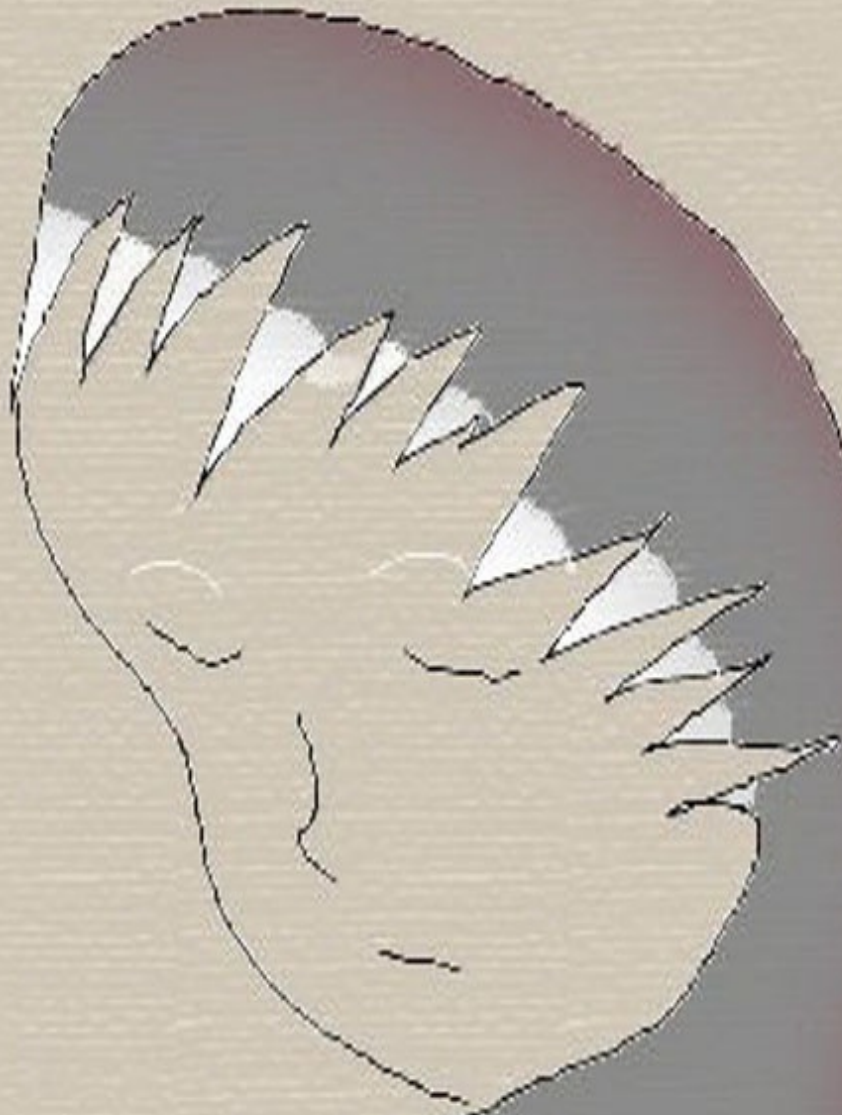


作 西瓜修



くらげぶりん

くらげぷりん

彼女は「くらげぷりん」を食べたいと言った。

僕は方々探した。

人に聞いても誰も知らなかった。

スーパーに行って恥をかいた。

ばかにされた。

悲しくなって海に行った。

堤防から網でくらげをすくってみた。

こんなものからぷりんができるのだろうか。

ちょっとかじってみた。

しびれた。

麻痺した舌で彼女に報告した。

彼女は大笑いした後、いきなり抱きついてきて唇を吸った。

「これこれっくらげぷりんっ」

彼女の舌がからみついた。

わけわかんないけど

またしびれた。

彼女がいきなり俺の腕にタトゥを彫りはじめた。

やり方なんてめちゃくちゃだ。

とにかく針でつついて墨を塗ればいいと思ってやがる。

冗談じゃねえ。なんでオマエの名前なんか彫らなきゃなんないんだ。

「あのね。わたしは、確かなものが欲しいの」

なにが確かなものだ。この世に確かなものなんてありやしねえ。

「永遠を刻むのよ」

なにが永遠だあ。ふざけんな。お釈迦様だって言ってるあ。諸行無常。

この世のものはすべて移ろうんだ。形あるものは崩れ、生あるものは死ぬ。

なにひとつ永遠に存在するものなんてないんだ。おれは近くの川に彼女を引っ張っていきその水を手ですくうように言った。

「いいかっ 今すくった水を同じところに返してみろ。

ほれ。河は流れてんだ。変わってんだよっお前がすくった川はもうとっくにないんだ。

ほれほれ見ろっバカがあっ」

しばらく呆けたようにオレを見ていた彼女は、ふっと笑うと

濡れた手でオレのおでこをペシッと叩いて言った。

「あんたね。恐竜知ってる？きょーりゅー。

恐竜が生まれてあたしら人類が生まれ、現在に至るまでを24時間にたとえろとはい、問題です。あたしら人類の時代はどのくらいでしょう？」

「はあっ？」

またおでこを叩く。

「どのくらいでしょうってオマエ。えっと。ちよとまでよ。

えっと30分くらい？」

またおでこを叩く。

「ぶー。3秒だよ。3秒。ということはあ、あたしとあんたが出逢って

あたしらが死ぬときまでなんて、コンマ1秒にも満たないんだよ。

まばたきすらできない、あっという間なのっ。あたしの願う永遠なんて

それっぽっちのことなんだよっ。そんな永遠さえアンタは拒否すんのかっ

ああっ？」

最後に頭突き一発。

シューと音を立ててしばむオレをひきずって

彼女はのっしのっしと家に帰っていく。

Right as rain —夢の数ほどあめが降る—

ひさしぶりにバスに乗ってどこかに行こうかと
バス停のベンチに座ってぼんやり空を眺めていたら
ゴロゴロ雷が鳴りだしてどんより重たそうな雲が湧いてきた

ぽつぽつと額にあめがあたりはじめる
「お兄さんにもカサを貸してあげなさい」
突然、バスを待っていたお母さんが
赤いカッパを着た幼稚園児の娘に言う

隣にちょこんと座って「はい」と差し出された小さなカサに
とまどいながら断るのも悪い気がして
背中を丸めて一緒にカサのなかに入る
あどけない瞳でのぞきこむように僕を見て言う
「あめはねー、雲の上でバクが喜んで駆け回るから降るんだよ」
「へえー」
「誰かがいっぱい夢を見るとそれを喜んで食べるんだって
ほら、バクの毛が降ってきた。ほら。ね」

白い綿毛のようなものがあめと一緒にふわふわと落ちてくる
なんだか見ているとまぶたが重くなって眠くなる
あくびをするとお母さんが笑いながら言う
「眠毛っていうんですよ。気じゃなくて毛のほうね」
隣にいたサラリーマンのおじさんが不思議そうな顔をして
空を見上げている

やがて遠く雨に霞む森の方から
大きな体を揺らして
毛むくじらのバスがやってくる

月夜の散歩

月夜に犬を連れて散歩に出た。

境川という神奈川と東京都の県境に流れる川の畔を歩く。

橋のたもとまで来ると何やら小さな生き物が何匹も橋の隅をぞろぞろ動いている。アメリカザリガニだ。向こう岸に渡ろうとしているようだ。橋の上には若い男女が腰掛けている。ピアスをした丸坊主の男はコーラを飲みながら笑い転げてる。女のほうは黒いワンピースを着てなにやら無心に食べている。

—やめろってばっ ふはは やめちくりー

男は笑って橋から転げそうだ。

私と犬は知らん顔してザリガニを見ている。

赤いハサミが月明かりに映えて美しい。

やがて女の口から泡がいっぱい出てくる。

男はだんだん真剣な口調になってくる。

—やめてくれ。愛してるから。なっ そんなことすんな

よく見ると女が手にしているのは石鹼だ。

石鹼をなにかナイフのようなもので削っては口に運んでいる。

ぶくぶくぶくぶくと女の口から泡が吹き出し、しゃぼんが舞い始める。

半狂乱になって喚いていた男の声が小さくなる。

口はパクパク動いている。だけど声がすぐに消えてしまう。

見るとしゃぼん玉の中に男の吐き出した言葉がすっぽり入って

ふわふわ浮いている。

「愛してルーッ」

と何度も叫んでいるらしい。

『して』と『愛』と『ルーッ』が交錯しながら、ふわりふわりと宙に舞う。

これまた月明かりに映えて美しい。

そのうち『して』は空高く舞い上がり、『ルーッ』はクルクル回って

風に飛ばされてしまった。

『愛』はどこに行ったのだろうかと思ったら、地面にみんな落ちていた。

男は丸坊主の頭を抱えてうずくまってしまった。

女は月を見たまま、相変わらず泡を吐き続けている。

ザリガニが『愛』をはさみで拾い上げて、黙々と向こう岸に行進していく。

犬が月に向かって一声吼えた。

東京都に行くのは今日はやめにしよう。

同棲

ひよんなことから外国から来た娘と同棲することになった。
彼女は日本の習慣になじめず部屋の中でも靴を履いている。
日本の靴もあわないのか、何度もマメをつくっては泣いている。
そうして靴を何度も買い換えるので部屋中靴だらけ。
一度頭にきて靴を全部庭に投げ捨てようとしたら、わけのわからない言語で泣き喚いて
それから家を飛び出してしまった。
私はその度に彼女を探して日本中を歩き回った。
やっと見つけると新しい部屋でやっぱり彼女は靴に埋もれた生活をしていた。
彼女は目に涙をいっぱい溜めて私に抱きついてきた。
私が靴のことでとやかく言わなければとても献身的で、私を愛してくれた。
何故私から逃げるのか、何故靴を何度も履き替えようとするのか、問いかけても
口を閉ざしたままだった。
そうしたことが今まで幾度となくあった。

何回目かのケンカで家を飛び出した彼女を見つけたのは、東北のとある離れ島だった。
誰もいない小さな島で砂浜に立てられた漁師小屋のようなところに住んでいた。
靴の山の中に埋もれ、やせ細った彼女。
靴はどれももうボロボロで満足に履けるようなものはなかった。
彼女は衰弱して小動物のように震えていた。
私は異臭のする靴を窓から投げ捨てた。
彼女はもう大声を上げて抵抗する元気を失っていた。
そして悲しみに満ちた大きな瞳で私を見あげるのだった。
それからしばらく私たちは野草や魚を食べて暮らした。
彼女は衰弱していたがしあわせそうだった。
時折、私に何か伝えようとするが、なにを言っているのか聞き取れなかった。
ある晩、わたしはずっしりと下半身が重くなっているのを感じた。
体を引きずるように起き上がると彼女がいない。
私は這う様にして外に出て、彼女を呼んだ。
大きな月の青白い光に浮かび上がる砂浜に、彼女は海に手を差し
出すように立っていた。私は必死に這っていった。
なんでこんなに足が重いのか。足を引き上げるように手で触ると硬かった。
足はまるで木のようなようだった。
皮膚が乾燥し百日紅の木肌のように硬くつるりとしている。
彼女は振り返ってあの悲しげな瞳で見つめていた。
波打ち際に立つ彼女の足も木のように黒ずんで見える。
私はうろたえ、一步も動けなくなってしまった。みると足から根のようなものが生えて

砂浜に食い込んでいる。

私の搾り出すような絶望の叫びが砂浜にこだました。

やがて満潮になり彼女の下半身が海水に浸されると、彼女はなにかを諦めたような瞳でさびしげに笑った。

そして身を翻すと海の中に消えてしまった。

月明かりに照らされた海面に大きな魚の尾ひれのようなものが現れて、すぐに消えた。

私はそうして砂浜で木になって立っている。

腕からはさくらんぼのような赤い実がいっぱい生えてきた。

満月の晩には、見知らぬ人魚がその実を食べにくる。

リスの息子

リスの息子はウソツキでした。

毎日、森中を駆け回って

「でっかいワシがくるよーっ 助けてーっ」

と大声でわめきます。

森の動物たちは最初のうちは助けに行こうとしましたが、ウソだとわかるとだんだん相手にしなくなりました。

それでもリスのお父さんだけはいつでも助けに行きます。

そうして「ワシはどこだっ でてこーいっ」と小さい手を

ブンブン振りまわして息子の周りを駆けまわります。

動物たちは、こいつらグルでウソをついてやがると言いました。

息子は「本当にいたんだよっ ホントウだよっ」

とナミダを流して言いました。

お父さんはその度に「ウム」とうなずき、息子の頭をなげました。

やがて親子は「ウソツキ親子」とののしられ、息子には友達のひとりもいなくなりました。

自分のウソが通じなくなり、息子はとぼとぼと歩きながら

もっとおおきなウソを考えてみんなを驚かそうと思いました。

そのとき、大きな悪魔のような影が息子のからだを横切りました。

見上げると巨大なワシでした。

息子はすくんでしまい、声も出ませんでした。

ばさばさと羽音を立ててワシは息子に襲いかかります。

その時です。

お父さんがどこからか現れ、ワシの背中に飛びのって力のかぎり噛みつきました。

ワシはもがいてあがったりさがったりしながら大きな羽で

お父さんを振り落とし、逃げていきました。

お父さんは頭から地面に叩き落とされましたが、フラフラしながら

まだファイティングポーズをとっていました。

息子は泣きながらお父さんの胸にしがみつき叫びました。

「おとうさんっ おとうさんっ ぼくはずっとウソをついていたんだよっ」

お父さんはいきなり息子を殴り飛ばしました。

3メートルくらいふっとびました。

おとうさんは鼻息あらくファイティングポーズのまま、叫びました。

「いつもいつも現れるとって息子をだまからかしてやがって
この大ウソつきのワシめっ かかってこいっ」

目をまわしながら息子はたちあがり

「ぼ、ぼくだよ。お父さんっ」

と言いました。

「おまえはむすこなんかじゃないっ かかってこいっ」

とお父さんは血走った目で、投げ飛ばしました。

「ぼくだよっ」と言っても容赦なく何度も投げ飛ばされます。

やがて地面に叩きふせられた息子はぐわんぐわんと回るあたまをふり

お父さんを見あげました。

血だらけで宙を睨みながらファイティングポーズをとっている

お父さんの姿。

お父さんはポツリと言いました。

「...ウソはイテェな」

息子は泣きそうになるのをぐっところえて立ち上がると

お父さんの真似をしてファイティングポーズをとりました。

お父さんはニッコリ笑って、気絶しました。

サブレ

公園のベンチで頭を抱えてうずくまっていると初老の男性が傍らに座った。

黒いシルクハットにグレーのスーツを着た紳士だ。

上着の内ポケットに手を入れてなにかをとりだした。

「どうぞ」

みると、透明な和紙のような袋に包まれたお菓子だった。

「メランコリーサブレです。憂鬱なときはこれに限ります。元気でますよ」

私はおもわず受け取った。

紳士を見ると、黙ってうなづく。

何の変哲もないサブレでまんやかに「めらんこりー」とへたくそに書かれている。

ふたつに折るとパラパラと粉が膝の上に落ちた。

払いながら隣を見ると、風のように紳士は消えていた。

ハトが集まってきて落ちた粉をついばんでいる。

みるみるうちにハトたちは元気になり、盛んにぽっぽぽっぽと首をふりだした。

わたしはうれしくなって、サブレを口に運んだ。

甘い香りが鼻腔をくすぐり、ふわーっと口の中で溶けていく。

ぽっぽぽっぽ。はとぽっぽ。

もぐもぐと口を動かしていると、目の前のハトたちの首が勢いあまってぽんぽんと宙に飛んだ。

首のないハトたちはそれでも体を揺すっている。

地面に落ちた首がぽっぽぽっぽと鳴いていた。

CM

『憂鬱なときはこれ。メランコリーサブレ。』

お口の中でふわーっと溶けてみずみずしい朝です。

ロツテ「メランコリーサブレ」

あなたにあげたい。あげたくない』

何日もはっきりしないぐずついた天気が続いているおかげで部屋中洗濯物だらけだ。

部屋もムッと蒸して不快なので先日買ってきた湿気取りを探す。

寝室からキッチンに行く間、洗濯物を掻き分け進む。

どこかからカエルの鳴き声がする。

タオルタオルTシャツパンツパンツタオル。

連続する色とりどりのカーテンを捲るといきなり視界が開ける。

白いTシャツの向こうには、遠く田んぼが広がっている。

確かりビングのはずだったのだが。

ショックを受けて呆然としていると遥か向こうで女が腰を曲げて

田植えをしているのが見える。誰だ？

「あなた一、丁度ヨカッタっ こっちに来て手伝ってえッ」

麦藁帽をとり、屈託のない笑顔で手を振っている。ダレ？

「か、カミナリが来るよッ」

なぜか私は手招きをしている。

足元を見るとカエルがぴょんぴょん飛びついて足の甲にしがみついてくる。

うわえうあっ。なんだかわかんない声を出し逃げ出すように私はキッチンへと向かう。

びしゃびしゃと泥の感触。

パンツタオルパンツタオルシャツシャツシャツ。最後にパンツを捲ると、キッチンが現れる。

誰かが白いエプロンをつけて何かを炒めている。

体は人間だが顔は水牛だ。しきりに首を振り、オペラを歌っている。

体を反りフライパンを宙に振り上げ体をスイングしながらツノをフリフリ歯をむき出して歌う。

トウモロコシの粒みたいなのが部屋中に撒き散らされ顔にビシバシと当たる。私は水牛の胸倉を掴んで罵倒する。

水牛はかまわず益々のけぞって歌う。その口を両手でワシづかみする。

でかい歯の向こうに黒曜石の様な暗闇が広がっている。咀嚼される暗黒の宇宙。

甲高い歌声が三半規管を駆け回り脳髓を掻き回し洪水に飲みこまれるように意識が遠のいていく

。

やがて静寂が訪れる。天の川が見える。洗濯物のシーツが風に揺れる。

シーツの向こうから先ほどの女性が現れる。

一糸纏わぬ姿で私の胸に飛び込んでくる。

「収穫です」

「ああ。豊作だっ」

私はその豊穣の体を愛しむように貪る。狂おしい愛撫。雷の音が駆け巡る。

女の爪から青白い閃光が迸る。一気に絶頂が突き上げる。
ちりちりと肌が焦げる匂いがする。私と彼女の上皮が紅く燃え
木肌のように捲れ上がり剥がれ落ちる。新しい艶々の肌が露出する。
琥珀色した彼女の口から米粒がはぜるように一杯飛び出してくる。
しっとり潤いのある白い肌に金色の水が流れ落ち、私の唇に注がれる。
一切の不安がちぎれ雲のように霧散して青い空が広がる。

実家の物置に灯油を出しに行った時、すっかり忘れていたものに出会った。一瞬、何かわからなかったが、すぐに昔の友人に会うが如くに思い出した。それはひっそりと物置の奥に、火山灰のような埃を被って、わずかに差し込む光に照らされていた。

ハキをかけて、あちこちに伸びたツタを剪定し、丁寧にそれを取り出してみた。宿木のようなツタが絡まりあいながら伸び、直径50センチほどの鳥の巣状になっている。手に取ると軽いそれは、すっかり土気色になり、枯れてしまっているように見えた。父さんはその木を手にした私を見ても、何も言わなかった。ただ黙って頷いて、3年前に亡くなった母さんの仏前に手を合わせた。

この籠のような木を東京に持ち帰ってから、3ヶ月。毎日水をやり栄養剤を与えていたら、ツタに生気が戻り、緑色の芽が吹き、葉も何枚かつけるようになった。大きさも3倍くらいになったろうか。

「オボ・・・」

私は顔を寄せて小さい声で囁いた。するとツタはうねうねとゆっくり動き出し、籠の上部を開きはじめた。何年ぶりだろうか。私はその丸く開いた入り口から、そっと中に入り、仰向けになった。ツタが包み込むようにドーム状に織り込まれて、まるでさなぎの中にいるようだった。懐かしい記憶が鼻腔からツンと湧き上がってくる。

「変わらないね」

指でなぞると、さわさわと葉が揺れた。

私は実は、拾われた子だった。両親が山で見つけた時、このオボの中で生まれたばかりの私は泣いていた。家に持ち帰り、ツタを切って私を救おうとすると、オボは身を震わせ、私は一層激しく泣いたのだという。

私は五歳になるまで、この籠のようなフシギな宿木の中で成長した。このことは両親と私以外、誰も知らない。

オボの中で眠りながら、私はいろいろなことを知った。私が何故生まれてきたか。どうしてここにいるのか。なぜ生きているのか。地球はどうやって生まれ、生き物はなぜ進化してきたのか。宇宙がどこからきて

どこにつながっているか。

オボは私にそれを夢を通じて教えてくれた。

オボの意識と私の魂が結ばれ一体となり、夢という形ですべての
真実が具現化された。

オボのみる夢は私のみる夢。

夢は次元を超えてループする現実だった。

いや夢と現実という二元律の言葉さえも超越した、めくるめく感応の世界だった。

しかし、五歳になった私を、オボは何故か突然吐き出した。

その後、母さんによって私の目の届かないところにしまわれ、二度と見ることはなかった。

それが離婚して実家に一時身を寄せていた私と、ひよんなことから懐かしの再会となったわけだ。

—どうだい、オボ。オレは変わってしまったかい？

ツタがゆっくりと目の前に伸びてきて、私の鼻先でとまった。

甘い乳の香りが漂い、ツタの先端から乳白の液が滲み出る。

まだオボは私のことを子供だと思っているのだ。アルツかおまえ。

私は苦笑しながら、そのツタの先を口に含んだ。

ツタが何本も伸びて、からだをそっと撫で始めた。

わたしは目を閉じて、オボがはいってくるのを受け入れる。

ただいま

オボ

わたしはまた、おまえを必要としているようだ。

狼と蠍

ドアを一枚隔てて夜と昼がありまして
月夜の晩にウサギの着ぐるみを着た狼が
こんこんこんと3回ノックした向こうは
太陽の頬が渦巻き灼熱の風が舞う砂漠で
一匹のさそりが穴の周りでクルクルと
まわっているのではありません

狼の胸はさそりに刺された毒で大きく膨れ上がり
今にも張裂け破れてしまいそうでしたが
その痛みがたまらなく愛おしく狂おしく
もう一度最後の一刺しをと
再度ノックしようとしたのですが
息を潜めてこちらを伺っているさそりの気配が
明かりの漏れた窓から伝わってくるので

そんなに逢いたくないのか
そんなにオレは嫌われてしまったのかと
狼はなんだか急に萎れてしまって
そのまま屋上に登っていったのです

そうしてお月様の光を浴びて
狼はウサギの着ぐるみを脱いで
吼えたのです
月が凍るような悲しい声で吼えると
そのまま氷のように次第に固まって
息絶えたのでした

さそりは小窓から
はあはあ胸を掻き乱し
歓喜の瞳を潤ませて
その様子を見ておりました

さそりは
狼が死んだことに
気がつかないのでした
狼の目が黒曜石のように

濡れて光っておりました

炊飯器の女

炊飯器を胸に抱えたまま、ゴミ処理場の前に立っていた。

「粗大ゴミはこちら」という看板が見える。

おれはどうにも動けなくなってしまった。

ランプの精ってご存知か？

そう。こすると「ご主人様～っ パパパラパ～」とか言ってケムリと共に現れる奴。

信じられない話だが実はオレの彼女もこの類のものだ。

もっとも彼女の場合は炊飯器から出てきた。

十年前ヤフオクで落札したものだったが、すぐに故障し、ほったらかしたまま忘れていた。引っ越しの際に思い出し、捨ててしまおうと拭いていたら出てきたのだ。

ごはんが炊ける時に出るあの白い水蒸気と共に。

笑ってしまう話だがそれ以来居座ってしまい、かれこれ7年。

普通ランプの精というとなんでも願いをかなえてくれるものだが、こいつは違う。

わがままであまのじゃくで気に入らないと途端に機嫌が悪くなる。

キレルと泣きながら何でも消してしまうのでコワイのだ。

この間も冷蔵庫を消してしまったために、しばらくインスタント食品と総菜でガマンする生活が続いた。

当然ケンカも絶えないがこれまた口が達者で容易には勝てない。

「あんたは文房具より使えないわね～」とか言うもんだからこっちも

「ふざけんな 豚汁野郎っ」とかめちゃくちゃに応戦するが

「ふ、あんたってビューティフル馬鹿ねえ…」なんて軽くつぶやかれて

おれは毎晩、血の涙を流している。

こいつには人を愛するという観念がないのだ。愛されてあたりまえ。

たしかにまあまあ顔は可愛いし、若いし、スタイルもいい。

だれどそれをのぞいたらオマエに一体何が残るというんだっ。

炊事、洗濯するわけでなし、おれのために何かすることが自分の損みたいに考えてやがる。

あたしがここにいるだけであなたは幸せなのよ、なんてほざきやがる。

何を買ってやっても気に入らなきゃ怒るし、どこに連れて行っても、ちょっとお金のことを言う

と
不機嫌になる。

んである晩、とうとう頭きたから炊飯器をおもいっきしこすってやった。

そしたらやつめ、しゅるるるなんて音させて炊飯器の中にはいっちまいやがんのっ
はははは～

いいざまだ。もう一生出してやらないからなっ

へっ

それから一ヶ月…。

あいつは出てこない。

前にもこんなことがあったな。そんな時は3週間出てこなかった。

しょうがねえから、こすってみたけど、出てこない。

叩いても額こすり付けても手を合わせてお願いしても出てこない。

「出てこいっ シャザーン」って言っても出てこない。古いねどうも。

いやその前に「出てこいっ トン汁野郎っ」って言ったのがまずかったのか。

んで、オレは頭にきて、捨てにきたのだ。

この粗大ゴミをっ

で、立ちすくんでいるのだ。

だれか、この炊飯器もらってくださいませんか？

可愛い悪魔付きですよ。ゴハンは炊けません。

オレは炊飯器を粗大ゴミ置き場にそっと置いて、もう一度さすってから、ダッシュした。

もうしらん。もうしらんわ。

おれはどうせビューティフルバカだよおおおおおっ

とぼとぼと家に帰ると、だれかがキッチンに立っていた。

あいつだ。振り返らずに言う。

「相変わらず、ミミズより遅いわね。ご苦労さん」

見ると、テーブルの上に夕飯の支度ができている。

白いエプロンをしてクルクルの天然アタマをかしげてにっこり笑いやがる。

「ふ、ふーん。おまえにも経験値ってのがあったんだな」

おれは嬉しさを隠してほかほかのゴハンにバクついた。

みると捨てた炊飯器のふたが開いている。

あれで炊いたのか。よく炊けたものだ。

あいつは言った。

「おいしい？」

ああ、んまいんまいと食べる。

「おいしい？」

何度も聞くから、ああ、んまいってばよっとめんどくさそうに言って、ふと見ると

あいつがなんだか透けて見えた。

からだ半分なくなっちゃってる。

あぜんとしてとしているオレを見ながら、あいつは言った。

「おいしく食べてね」

「え？ああ。んまいよ。それよりおまえ…」

「食べて、食べて」

おれはまたゴハンを頬張る。

そうするとまたあいつがだんだん消えていく。

「あと一口よ。ほら」

「ん、うん」

最後の熱いかたまりを口に入れるとあいつは、静かに手を振った。

「おいしかった？それ。あたしよ。いままで、ありがとう」

踝 【くるぶし】

今年はじめてみたススキの穂を庭先に飾り
半欠けの月を団子を頬張りながら縁側で眺めていますれば
突如として思いもかけぬ激痛が走る
みるとあなたがトンカチをもって
わたしのくるぶしを叩いたのであります
あまりの痛さに声も出ずあなたを見るとひひと笑っていたのです
「化石ごっこ」といいまして
時折互いの体をトンカチで叩く遊びが二人の間には
流行っておりましてこうゆう事態になったのでありますが
心の芯まで響くようなその痛さにもんどりうって庭先に転がり
くるぶしを掴んで呼吸を整えること数分。
「そなたのそこにはなにかがあるであろう」
と問いかける月明かりに浮かぶあなたの鬼微笑
「わたくしの知らぬなにかがあるであろう」
と迫るあなたの問いに考えるまもなく
突然くるぶしからなにかが噴出し
嗚呼嗚呼と両手で押さえるが指のすきまから溢れ出す
忘れ去られた記憶の雫か
忌まわしき瘡蓋の剥がれ落ちる血か

過去の終着駅に独りぼつんと残されたような
悲しみも切なさも通り越した透明な世界に投げ出され
もしやここは月の裏側かと力なく呻きたれば
ぶるぶると頭を振って正気を取り戻し
やおら飛び起きて溢れ出るものも構わずトンカチをひったくると
「やあやあ おのれのくるぶしも叩いてくれようぞ」
とあなたの足首をむんずと掴む
ひいと鳴いて畳を爪で引っ搔きながら逃げ惑うのを
ぐいと引き寄せたならば
浴衣の裾が乱れて露となった太ももの一文字の傷に目を奪われ
はあはあと唇を寄せる
「そこはそこは いけませぬ」
と困ったように額に皺寄せ懇願するもトンカチを投げ捨て
息荒くあなたに覆いかぶさればどこからか鈴虫の鳴き声が

「どこで鳴いているのでしょうか」

「はて どこであろう」

そうして二人はくるぶしのことなどすっかり忘れて
わたしはあなたの膝枕で団子を頬張りながら
鈴虫の鳴き音にうつらうつらとするのでありました

さすらいのオキシドール

思えば、あれは小学6年生の時の運動会。

友達がリレー競争で砂埃を舞い上げながら転倒した際に、保健委員だった私はその子のすりむいた

膝にオキシドールをかけてあげたのです。

血の滲んだ傷口から泡がムクムクジュワァと湧き上がり、何故だか私は全身の毛がそば立つような

快感にうち震えたのです。

ヒトを含めた、多くの動植物の体内にはカタラーゼという酵素があり、体内にできた有害な物質を水と酸素に分解する働きがあります。傷にオキシドールをつけると、このカタラーゼが触媒の働きをし、オキシドールが水と酸素に分解されます。この時、酸素の生成の様子は「傷から出る泡」として観察されます。そしてその作用で傷の周りについていた雑菌等を殺菌していると考えられています。実は「傷から出る泡」の正体は酸素だということです。

いやそんなことはどうでもいいのですが、とにかく私はその不思議な快感を忘れられず、今では出歩くときには必ずオキシドールをカバンに忍ばせ、全国津々浦々の運動会に出没し、傷ついたり子供たちに片膝をついてオキシドールをふりかけ、無言で去っていくという荒行、いや荒行でもなんでもありませんが、なんてことをしてしまして、いつしか人は私のことを

「さすらいのオキシドール」

と呼ぶようになったのでございます。

ええ。ええ。私の名前は「岸田京子」です。

中学時代から「オキシ」と呼ばれていたのも定めでございます。

これも私の運命、使命と勝手ながら思い込み、今では運動会のみならず、道行く人が倒れていれば

駆け寄りふりかけ、交通事故があればその被害の大小に関わらずふりかけ、心の病に沈みこむ人の

頭にもふりかけ、もうところ構わずふりかけ人生まっしぐら。オキシドールはすでに私自身と言って

いいほど私のアイデンティティはもうすっかりオキシドール。何を言ってるのかわからなくなりましたが

いいんです。

わたしは「さすらいのオキシドール」

胸を張って生きていきます。

傷ついた人はどうか大きな声でいや小さな声でもいいですが呼んでください。

「オキシーっオキシーっ」

と。

私は笑いながらいや微笑を浮かべながらあなたのもとに駆けつけます。

少女と大人の間

少女はこの過疎化の進んだ農村で一生過ごしたものかどうか悩んでいた。
親友のタカコは高校卒業後、都会に行って高速道路でトラックに轢かれて
一足飛びに大人になったらしい。

私はせいぜい田んぼのあぜ道で足を踏み外すぐらいが関の山。

どっちがホントの大人になれるんだろう。

少女は買ったばかりの口紅をつけ両手を広げて春の田んぼを横切る。

まるで綱渡りのように胸をはって。頬は燃えて額は冷たい。

雪化粧

溶け始めた雪の合間から黒い土がクレパスのように広がっている。

眩しい朝の光が黒々とした木々と残雪を照らし、辺りの明暗を際立たせている。

白い冠を被った杉林の向こうは再開発された駅前で、高層ビルが筑紫のように空に向かって伸びている。

霜のように硬くなった雪の感触を靴底に感じながら、私はしんと冷え切った公園の広場に立っていた。

雪面に亀裂を走らせる漆黒のクレパスを避けるように、コートのポケットに手を突っ込んだまま、左右に

ステップを踏むように進む。

ぽっかりと丸く開いた黒い空間に古ぼけた木製のベンチがある。

一瞬雪の白い縁に躊躇して留まり、おもむろにクレパスの中に足を踏み入れる。

白い息を吐きながら深々とベンチに座る。

何気に前を見ると溶けかけて黒ずんだ小さな雪だるまが首を傾げてこちらを見ていた。

ポケットから煙草を取り出す。

続いて、ライター。

がポケットから出てきたのは、口紅だった。

いつの時代の遺物なのか。長いこと着ていなかったコートにあらかじめ入っていたのか。

思わず苦笑する。

ふと気配を感じて横を見ると、少し離れて小学生らしい女の子が座っていた。

長い睫毛の下に黒曜石のように濡れた大きな瞳を見開き、口紅をみつめている。

「欲しい？」

訊ねると、こくりと頷く。

こんな少女に口紅なんて、と思わず訊ねてしまったことを後悔した。

少女は不器用そうな手先で口紅のキャップを開けたり閉めたりしている。

おもむろに口紅を私の顔先に差し出し、小さな唇を突き出す。

「塗れ、ての？」

少女は頷く。大きな瞳が人形のように閉じられる。

口紅を塗っている間、時間が急にスローになり、記憶の欠片が雪の結晶のようにふんわりとクレパスに

舞い落ちていくように感じた。

そういえば、彼女にもこんなふうに口紅を塗ってやったことがあるな。

彼女？誰だったろうか…。

恥ずかしそうに睫毛を伏せて、私の視線を避けるように横を向く。

我ながら、うまく塗れたと思う。

暫く少女は足をぶらぶらさせて空を眺めていた。

生まれたての若葉のような唇に紅が光っている。

「学校は行かなくてもいいのか？」

私の問いに唇を閉ざしたまま、青く澄み切った空に白く尾を引く飛行機雲をみつめている。

ライターがないことをすっかり忘れてしまって、また煙草を取り出し、ポケットを弄る。

するとひょいと目の前にライターが現れる。

「タバコ、やめるんじゃないの？」

見上げると、白いコートを着た女性が立っていた。

ライターに火が灯る。顔を寄せて啜え煙草に火をつける。

ジジ...と耳の奥で音がして、赤いネガのような映像が網膜を過ぎり燃える。

とうに忘れてしまっていた女の笑顔...

眩暈がして、足元の黒いクレパスが揺れ、反転したように真白くなる。

深々と吸い、煙を吐き出し、ふと横を見ると少女の姿はもうない。

「ほら、早くしないと。乗り遅れるわよ」

私の手をひっぱり、眉間にシワを寄せている妻。

慌てて立ち上がり、駅の方へと歩を進める。

「あら、かわいい雪だるまね」

妻の声にみると、先ほどの雪だるまが佇んでいる。

「溶けちゃってかわいそう」

そう言いながら、妻の足は止まらない。

私はそっと雪だるまに、手をあげる。

小首を傾げた雪だるまの口に、小さな紅い葉っぱがついている。

つれさらんば

「いたらなにやらこのあいだにそらしね」

「かなりやばしぬきやまこのやま」

西日が差し始めた電車内。

座っている私の前にグレーのスーツを着た初老の紳士が吊り革につかまって立っている。

そしてその横に16歳くらいとおぼしき色白のなかなか美人な女子高生。

時折、ぼつりぼつりとこのような怪しげ意味不明な会話をし始める。

紳士「そういえばたらんこみたかそらみたか」

女子「うんうん。しらかばなみきによりそえるまいそえぬか」

ちんぷんかんぷんである。

ただ表情をみる限り、おだやかで、なんとなく幸せそうだ。

女子高生は孫だろうか。

ふと、爺さんが胸のポケットからなにやら取り出した。

紳士「まなんだれんばさらまんすらすらさ」

女子「あはは。さくらんまらんぼしってるんさー」

どこぞの方言だろうか。

沖縄の宮古島あたりの方言ならば、こんなふうにもまるで外国語のように聞こえてもおかしくない。

爺さんが指につまんでいるものは、どうやら桜の花びららしい。

女の子はさっさととりあげてポイと捨ててしまった。

爺さんは笑って、またポケットから花びらをとりだす。

女子「かなりんすらっばーしょうがなくひろったりするんば」

紳士「つぎつぎまさらんぷりうすねんぴばらばらよー」

プリウス燃費ばらばら？

わけわかんね。

爺さんが出しては女の子がぽいと捨ててしまうものだから

次々と花びらが私の足やあたまの上に舞い落ちてくる。

ふと女の子が気付いて、私に手を合わせる。

私はおもわず手を振って

「いやいや。ねんぴばらばらかまわんよー」
と言った。

爺さんと女子高生は顔を見合わせて、にこっと笑う。
周りの乗客が気になってあたりを見渡すと、みんな眠ってしまっている。
車内アナウンスが聞こえてきた。

「つぎはあ〜つれさらんばれんばー、つれさらんばれんばで、おりたすきをつけ〜ん」

あれ？
そんな駅あったっけ。
ドアが開くと女子高生が私の手をとった。
どうやら一緒に降りよう、と言っているようだ。
桜の花びらをまきながら爺さんがドアの向こうの光の中に消えていく。

「つれさらんばれんばー、つれさらんばれんばー」

なんだかうっとりするような、いい匂いがする。

女子高生の白い指を握りしめる。

意味なんかどうでもいい、と思いながら。

さくら

「ここになにかがありまする」

そう言って彼女は化石発掘用のトンカチで
私の胸をとんとんと叩く。

「なにもありませぬ」

「いやいや、なにかあるであろう」

いつもの陽だまりの午後。

やがてポツカリと割れた私の胸の断崖を
丁寧に刷毛で掃いて

「ふむふむ」

と覗き込む。

「あった？」

彼女は答えない。

まるで考古学者のように眉をひそめて
くんと匂いを嗅ぐ。

一陣の風が胸の穴から舞い上がり

彼女の前髪をふわりと揺らす。

驚いた表情でなにかを指でつまんで
私の前に差し出す。

「これはなんであろう」

「はて、桜の花びらではあるまいか」

「うむ」

胸の穴は黒く深く死に絶えた闇。

白き花の咲くところ。

「さくらは一度死んでから咲き始めるのよ。だからあんなに幹が黒いの」

「だから、あんなに花は白いのか」

花は散り緑の葉が茂る。

桜は散って生き返る。

「収穫収穫」

そう言って彼女は舌に花びらをそっとのせ
私の手を取り踊りだす。

なにか言っているが言葉にならない。
畳にさす西日に二人の影が枝のように伸びて
くすくすといつまでも揺れている。